主催：日本弁護士連合会

高齢者・障がい者分野における新型コロナウイルスに関する連続学習会（第４回）

ウィズコロナ時代における障がい者
― 差別･いじめ･ストレスを避けるために ―

プログラム

日時：２０２１年3月２３日（火）１８：００～２０：００

【総合司会】辻川 圭乃
（日弁連高齢者・障害者権利支援センター委員）

Ⅰ　開会挨拶

延命 政之（日本弁護士連合会副会長）

Ⅱ　報告事項

新型コロナウイルス感染症拡大に伴う変化や影響等に関するアンケート概要紹介
油布 剛（日弁連高齢者・障害者権利支援センター委員）

Ⅲ　基調講演

ウィズコロナ時代における障がい者　―差別・いじめ・ストレスを避けるために―
内山 登紀夫 氏（児童精神科医／よこはま発達クリニック院長／大正大学心理社会学部臨床心理学科教授）

Ⅳ　パネルディスカッション

ウィズコロナ時代における障がい者　―差別・いじめ・ストレスを避けるために―
＜パネリスト＞
内山 登紀夫 氏
山崎 喜一郎 氏（社会福祉法人順源会常務理事）
青木 志帆（日弁連高齢者・障害者権利支援センター幹事／明石市あかし保健所法務相談支援担当課長）
福島 健太（日弁連高齢者・障害者権利支援センター事務局次長）

Ⅴ　閉会挨拶

青木 佳史（日弁連高齢者・障害者権利支援センターセンター長）

【資料目録】

資料番号	資料名称	頁数
1	新型コロナウイルス感染症拡大に伴う変化や影響等に関するアンケート概要紹介 ―　油布 剛（日弁連高齢者・障害者権利支援センター委員）	1/２８
2	コロナ禍での障害当事者の困りごと ―　青木 志帆（日弁連高齢者・障害者権利支援センター幹事／明石市あかし保健所法務相談支援担当課長）	１３/２８

資料1

新型コロナウイルス感染症拡大に伴う変化や影響等に関するアンケート概要紹介

弁護士　油　布　　剛

①「全国のろう学校/聴覚支援校における『新型コロナウイルスに係るアンケート調査』集計から～ろう・聴覚障害教育現場にふさわしい教育のあり方を探って～」
（全国聴覚障害教職員協議会，一般社団法人全日本ろうあ連盟新型コロナウイルス危機管理対策本部教育支援チーム　合同）
https://www.jfd.or.jp/covid19/wp-content/uploads/2021/01/20210125-covid-school-report.pdf

②「新型コロナウイルス感染症拡大に伴う発達障害児及び家族への影響－当事者・家族向けアンケート調査結果より－」
（国立障害者リハビリテーションセンター企画・情報部　発達障害情報・支援センター）
http://www.rehab.go.jp/application/files/6316/1102/0298/202101.pdf

③「新型コロナアンケート第２弾『自粛期間後の生活について【概要】』」
（ＮＰＯ法人全国ＬＤの会）
http://www.jpald.net/upload/files/questionnaire_2020_2_summary.pdf

④「自閉症児者の家族を対象としたアンケート実施について」
（一般社団法人　日本自閉症協会）
http://www.autism-japan.org/kenkyu/korona/koronaanke-to.pdf

①「全国のろう学校/聴覚支援校における『新型コロナウイルスに係るアンケート調査』集計から～ろう・聴覚障害教育現場にふさわしい教育のあり方を探って～」

（全国聴覚障害教職員協議会　一般社団法人全日本ろうあ連盟新型コロナウイルス危機管理対策本部教育支援チーム　合同）

＜調査対象者＞　全聴教正会員のうち，ろう学校/聴覚支援校に勤務する現職員

＜調査期間＞　令和２年７月１３日～２２日

＜回答者数＞　７５名

＜調査の主旨＞

これまでの現場での取組経緯をふまえ，来たる第３波に備え，ろう・聴覚障害教育現場に関わる意見を集約し，関係者への発信を試みたい。

＜調査結果の（一部）概要＞

・学校再開後の感染予防（複数回答可）については，ほとんどの回答者が「３密」防止の徹底，マスク着用，手洗いの徹底・アルコール洗浄の用意及び行事の中止や延期を挙げていた。特徴的と思える事項としては，授業のとき，口の動きや表情が見えるように，透明マスクまたはフェイスシールドの着用との回答も多かった（７０件)。

・フェイスシールドの効果や課題について，機能面については相手の発語に伴う口の形や表情等の視覚情報を聴覚的情報と併用することで音声日本語を認識するのに役立つとの回答がある一方，活用面においては光反射で見にくい，吐く息で曇る，外れやすい，汗がつくなどの問題点も指摘された。また，衛生上の問題や感染防止効果について問題提起がなされている回答もあった。

・一般の（布・紙製の）マスク着用で不便を強いられているかとの質問では，約７９％がはいと回答している。ろう･聴覚障害教育において，口の形は重要な役割を果たすと指摘されている。

・マスク着用からの対応では，透明マスクやフェイスシールドに変更したり，教壇に透明なスクリーンシートを設置したりしたり，重要な内容によっては十分なソーシャルディスタンスを確保することで対応したりしているとの回答や，マスク着用のまま，板書や視覚的教材提示，手話や指文字，筆談等で確認しているとの回答等あった。

②「新型コロナウイルス感染症拡大に伴う発達障害児及び家族への影響－当事者・家族向けアンケート調査結果より－」

（国立障害者リハビリテーションセンター企画・情報部　発達障害情報・支援センター）

＜調査対象者＞　①発達障害の当事者，②発達障害児者の保護者・家族

＜調査期間＞　令和２年７月２日～８月１７日

＜回答件数＞　①３５２件，②５００件

＜調査の目的＞

「新しい生活様式」の実践が進められる中，発達障害児者がどのような困りや生活の変化を感じているのかについて，実際の当事者や家族の声を聞いて把握し，発達障害児者や家族および支援者に有用な情報を発信するため。

＜調査結果の（一部）概要＞

(1) 当事者

・回答者の診断名はＡＳＤ（７４％），AD/HD（５３％），ＬＤ（７％），その他発達障害（７％），知的障害（８％），未診断（８％）であった。

・「新しい生活様式」の実践に伴う日常生活での困りごとで多かったのは「熱中症を防ぐために時々マスクを外したいが，外してもいいタイミングの判断が難しい」（４８％），「オンラインでの申込みや支払いなど，色々な手続がよくわからなくて混乱する」（３４％），「ネットだと買物をしすぎてしまい，お金にな関する心配事が増えた」（３０％）等であった。

・マスク着用については「がまんしてマスクをしている」（５０％），「マスクをすることが難しい」（６％）と，半数以上はマスク着用に困難を感じていた。

・マスク着用に困難を感じる理由としては，息苦しさと感覚過敏に由来するものが主となっていた。

・対面のオンライン化（パソコンやタブレット等の画面を通して会話する機会の増加）に伴う困りごと等としては，「どのタイミングで発言すればよいのか，よくわからなくて戸惑う」（４６％），「相手の話に集中しにくい（画面に映っているものが気になってしまうなど）」（２９％），「３人以上になると，誰が話をしているのか，よくわからなくて戸惑う」（２９％）等が多かった。

・一日のうち「テレビ」,「パソコン・スマホ」,「ゲーム（ゲーム機以外にパソコン・スマホ等でのオンラインゲームも含む)」に費やす時間について，コロナ流行前と比較して変化があったかとの質問については,「テレビ」,「ゲーム」では前と変わらないとの回答の方が多いが,「パソコン・スマホ」については増加したと回答した方の方が多かった。ただし，回答者によってはリモートワークや遠隔授業による増加分も含めていると考えられる。

・これからの生活等に関する自由記述をいくつか拾い上げると,「発達障害のある人や日本語が不自由な人に向けて，やさしい日本語でコロナについて発信してほしい。」,「発達障害のある自分の特性を生かせるような勤務形態（在宅勤務と出勤勤務を組み合わせた働き方など）が増えるといいと思う。」,「仕事が休みになった期間，賃金は６割しか出なかった。障害者雇用で勤務しており，そもそもの賃金が安いため，６割しか保障されないのはとても生活に困る。」,「病院で電話診療をお願いして断られ，この先，薬がなくなったらどうしたらいいか。電話診療やオンライン診療等を普及させてください。」,「ストレスで咳チックが前よりひどくなり，咳をしていれば周りの人とトラブルになったり施設や乗り物の乗りようが断られるのではと思って出かけられない。チックで車の運転ができないため移動に電車を使わないといけないのでよけい困っている。」,「社会全体に，監視主体でなく成果主義に基づいたリモートワークが広がってほしいです。コロナ禍以外であっても，発達障害者の社会進出の助けとなるはずです。」等があった。

(2) 家族

・回答者家族の診断名は，ＡＳＤ（７９％)，AD/HD（２７％)，ＬＤ（１２％)，その他発達障害（５％)，知的障害（３４％)，未診断（５％）であった。

・「新しい生活様式」の実践に伴う日常生活における本人の困りごととして多かったのは,「熱中症を防ぐために『人がいない場所ではマスクをはずして良い』と伝えているが，うまく判断できない」（４８％),「行きたい場所に行けなくなり，イライラしている。」（４８％),「『人との十分な距離』がどれくらいが適当か，目印がない場所だと戸惑っている。」（３６％）等であった。

・感染予防（手洗いやマスクをしなければいけないこと，三密を避けること等）についての本人の理解では,「あまり理解できていないようだ」（８％),「理解することは難しいようだ」（１８％）と，理解が難しい方も３割弱いるとのことであった。

・マスク着用については，「抵抗なくマスクをしている」（５２％），「がまんして，マスクをしている」（３５％），「マスクをすることが難しい」（１３％）と，約半数がマスク着用に困難を感じているとのことであった。
・マスク着用に困難を感じる理由については，当事者と同様，息苦しさと感覚過敏に関するものが多く，また調査時期が夏季だったこともあり，暑さについても言及されていた。本人の理解の難しさについての指摘もあった。
・本人が過ごしやすくなるように工夫した点についていくつか拾い上げると，「マスクの素材を変えたり，本人にあうマスクを探した。」，「具体的にマスクをすべき場所を教えた。」，「マスクは無理なので手指の消毒や手洗いをしっかりさせた。」，「玄関にアルコールを置き帰ったら消毒など生活動線の中で目で確認できるようにした。」，「不安が高い子なので，親がよく感染予防法や現状を吟味した上で，伝える情報を絞って脅さないように気をつけた」，「外に出る不安が大きいため，居場所支援等をオンラインでリモートに変えた」，「手洗い・うがいの手順も視覚的支援で習得。余暇活動や習い事の中止等は視覚的支援（イラストのスケジュール）で支援」等があった。
・最近（この１～２週間）の本人の様子については，「怒りっぽくなった・イライラしやすくなった／気分の浮き沈みが大きくなった」（３８％），「睡眠の問題が増えた」（２９％），「家族とのトラブル（親子／兄弟）が増えた」（２３％）といったように，何らかの心身の不調が一定数みられた。
・一日のうち「テレビ」，「パソコン・スマホ」，「ゲーム（ゲーム機以外にパソコン・スマホ等でのオンラインゲームも含む）」に費やす時間について，コロナ流行前と比較して変化があったかとの質問については，「テレビ」，「ゲーム」では前と変わらないとの回答が多いが，「パソコン・スマホ」については約半数が増えたと回答した。ただし，回答者によってはリモートワークや遠隔授業による増加分も含めていると考えられる。
・これからの生活等に関する自由記述をいくつか拾い上げると，「感染の怖さもさることながら，適切な距離感をとるなどの社会的な部分でトラブルにならないかということも大きな不安材料」，「マスクもできないし，人混みで大声を出すこともあるし，気になるものがあるとすぐに触ってしまうし，感染対策が非常に難しい。そして親としては感染の心配以上に人の目が気になる。迷惑に思われていないかと気になり，外出が億劫」，「家族や本人がコロナになってしまったら隔離生活や入院は難しいので不安。普段でも病院での治療や薬のこだわりがあるので。」，「学校が授業の遅れを取り戻すのに必死で

それについて行く子達の負担は大きい。」，「不登校だった子は，休校中は分散登校など楽しみに登校し精神的にも元気に過ごせていたが，いざ学校再開となり学校生活のコロナ対策様式，学習，行事の詰め込みなどの緊張が高まり再び登校できなくなった。」，「リモートの授業の要領が掴み難く，リモートなのに出校して実技課題を提出する等の臨機応変の対応が難しいこともある。親も初めてのことでフォローが難しい。」，「学校に行かなくても，自分のできる範囲で学ぶことができるようになってほしい。早急に学校のＩＣＴ化を望む。」，「外出したいタイミングで外出できない，外出できても何らかの制限がある状況に対して，子どもがひびの生活を過ごしにくいと感じている様子が見受けられ，親子共々とても疲れる。」，「再開している場所と自粛している場所があり，大人はなんとなく理解できるが，本人は混乱している。」，「コロナを機に様々な分野でのオンライン化が進めば，生きづらさが格段に減る人がいることを社会全体に知ってほしい。」等があった。

(3) まとめ

・「新しい生活様式」の実践が求められる中，マスクを外すタイミングの難しさや，ネットでの手続き／買物での困りを感じている当事者が多かった。

・マスク着用については，約半数が着用に困難を感じていることがわかった。着用が難しい理由としては，感覚過敏等，発達障害特有の困りを抱えている場合が多いことが示された。

・本人が過ごしやすくなるような工夫としては，本人に合わせた素材でのマスクの手作りや，視覚的に理解しやすいように感染予防の必要性を伝えるなどであった。

・睡眠や易怒性をはじめとする，何らかの心身の不調や将来への不安が増したと感じる当事者の割合が多かった。

・一方，外出自粛や他者と接する機会の減少により，身体的・精神的負担が軽減する等，何らかのメリットを捉えた回答は当事者，家族ともに一定数みられた。

・自由記述では，当事者及び家族から多数の回答が寄せられた。その中で特に，当事者や家族からの要望等としては，オンライン化が広がることへの期待や，わかりやすい情報発信，当事者同士のつながりの重要性や孤立対策，感覚過敏等でマスクがつけられない場合もあることへの周囲の理解，本人や家族が感染したときの対応等に関する情報を求める声などがあった。

③「新型コロナアンケート第２弾『自粛期間後の生活について【概要】』」

（ＮＰＯ法人全国ＬＤの会）

＜調査対象者＞　ＮＰＯ法人全国ＬＤ親の会会員

＜調査期間＞　令和２（２０２０）年９月２６日～１０月１８日

＜回答者数＞　総数２９８名

＜調査内容＞

「新しい生活様式」が広げられていく過程が，発達障害児者にも無理なく進められ，多様性のある社会においてよりよい形にしていくために，全国的な宣言解除後の生活の様子と今後の要望について調査した。

＜調査結果の（一部）概要＞

・まめな手洗い・マスクの着用について困っていることはあるかとの質問に対し，全体の１３％がはいと回答している。具体的な回答ととしては,「手の洗い方がいい加減」,「マスクをなくしたり忘れたりが多い」,「マスクをしていると呼吸がしにくい」,「感覚過敏でマスクをつけたくない」,「コロナが怖くて外すことができない」などがあった。

・買物等で通販や電子決済が進められていくことについては，全体の４６％が不安であると回答した。具体的には,「お金の管理や使いすぎが心配」,「パスワード等の情報管理を自分でできるようになるのか不安」,「トラブルが起きたときに対応できるかが心配」などであった。

・外出の際の身体的距離の確保や非接触対等等で困っていることがあるかとの質問では，全体の約１４％がはいと回答している。具体的には,「距離感がわからない。パーソナルスペースがうまく取れない。」,「話をするときの声が大きい」,「衛生エチケットを守らない人を見るとあからさまに嫌な表情や態度が出る」などの回答があった。

・娯楽や趣味などの活動での身体的距離やオンライン導入について困っていることがあるかについては，全体の約３７％がはいと回答している。具体的には,「運動不足やストレスがたまる」,「社会性を身につける機会が減る」,「ネット画面に，突然現れるバナー広告等がちらついて辛い」などの回答があった。

・その他，日常生活における変化でよくない点として,「外出が制限され，家でゲームをする時間が増えた」,「休校中に昼夜逆転になり，その後も生活リズムが整わず学校を

休む日が増えた」,「コロナの未知なことに対する恐怖がストレスで，家から出たがらない」,「ちょっとでも体調の変化があると，その後１週間ぐらいは強い不安が続く」などの回答があった。

・学校・園における感染症対策について困っていることや不安があるかとの質問では，全体の約１６％がはいと回答している。具体的には,「教室は常に『密』なので，わずかな体調変化でもコロナを疑い，不安になっている」などの回答があった。

・学校のＩＣＴ教材や動画，パソコンやタブレット端末等による個別学習や同時双方向型の指導の導入については,「授業を繰り返し視聴できるシステムにしてほしい」,「学習支援アプリなどが特性のある子にも合うものだと助かる」,「オンライン授業の顔出し声出しが難しい人への個別の配慮が必要」,「同時双方向授業が少なく，動画，コンテンツを見せるだけのオンライン授業が多く，本人の集中力が続かない」などの回答があった。

・学習環境の変化について不安や心配があるかとの質問では，全体の約３７％がはいと回答している。具体的には,「自分で勉強できる子どもと，支援が必要な子どもの学力の差がどんどん広がる気がする」,「休校措置や短縮授業の後，詰め込み式になり，パニックをよく起こし，自傷行為がひどくなっている」,「キャリア教育がコロナによってどうなるか不安」などの回答があった。

・就職の活動への不安や課題については,「障害枠の就職などさらに厳しくなる不安がある」,「就職のための面接など，ただでさえ苦手なのに，どういう形になるかわからないので不安」,「大学のキャリアサポートがオンラインになり縮小している」などの回答があった。

・支援機関の環境の変化に関し，放課後デイサービスや発達支援サービスでの活動について不安や不便があるかとの質問に対しては,小中学生の約２３％がはいと回答している。具体的には,「色々な地域の人が狭い空間に集まるので不安」,「マスクや手洗いができない利用者が多い」,「換気や消毒がきちんとなされているかが保護者にはわからない」などの回答があった。

・就労移行支援や就労継続支援の活動について不安や不便があるかとの質問に対しては,大学生及び就労準備中者の約２４％がはいと回答している。具体的には,「就労支援はＷＥＢでは難しいと思うので，在宅支援に戻ってほしくない」,「実習に行けなくなって，経験する場が少なくなり，就職への道が遠くなったように感じる」などの回答があ

った。

・発達障害者支援センターや障害者就労・生活支援センター，ハローワーク等の利用について不安や不便があるかとの質問に対しては，就労準備中及び在宅者の約２７％がはいと回答している。具体的には，「混雑しているため，感染しないか心配」，「コロナ禍でじっくり話を聞く時間が短くなった」などの回答があった。

・政府や自治体の施策については，「今回は親が行ったが，親がいなくなったらどうしたのかと心配になる」，「本人の理解に問題があるので，手続を手伝ってくれる人がほしい」，「障害者がわかるような情報発信や補助金等のお知らせを出してほしい」などの回答があった。

（アンケート回答から見える今後の「新しい生活様式」への課題）

新しい生活様式として，社会で非対面型・非接触型システムが進められていく上で，発達障害児者がその特性から情報を得ることができずに孤立することがないよう，手立てを講じる必要がある。

１．急な環境変化に対して丁寧な説明と対応ができるような学びの場の構築

・少人数学級

・ＩＣＴ活用による一人一人に合った学びの環境設定

２．変化していく環境にあって，必要な情報入手や手続の進め方に対する支援システムの構築

・支援機関の充実

・一人一人のニーズに合った支援

・相談窓口の明確化と支援機能の充実

例：オンライン化や電子決済などの手続の親身になった説明や支援

④「自閉症児者の家族を対象としたアンケート実施について」

（一般社団法人　日本自閉症協会）

＜調査回答者＞　自閉症障害児の家族等

＜調査期間＞　令和２（２０２０）年１２月１日～３１日

＜有効回答数＞　４２３件

＜調査目的＞

本調査の中で，自閉症の子どもや親・家族が生活を送る上で生じた困難さや心理的変化，社会資源の利用の可否等の状況を把握し，今後の日本自閉症協会の活動や国の施策要望の基礎データとすることで，新型コロナウイルス禍における自閉症の人とその家族の安心できる生活の実現を目的として実施する。

＜調査結果の（一部）概要＞

・全体の印象として，新型コロナウイルス流行に伴い，対象者（お子さん・自閉症の方本人）のメンタル面の状態はどのように変化したようにみえたかとの質問については，変わらないが５１．３％，やや悪くなっているが３４．０％，非常に悪くなっているが５．７％との回答であった。

・悪くなった理由（複数回答あり）としては，外出・外食・会食の制限（２０．７％），趣味や余暇の中止や制限（１８．３％），マスク着用の負担（１２．７％）などが多かった。

・対象者（お子さん・自閉症の方本人）の変化に関する質問の中では，ネットの動画やウェブをみる時間（学業や仕事は除く）の変化及びワイドショーやテレビニュースなどで新型コロナウイルス情報に接する時間の変化について，全体の約４０％以上が「非常に増えた」，「やや増えた」と回答している。逆に，家族以外との直接の対人交流（登校，出勤，通所，外出など）については，変わらないが３４．８％あったが，やや減った３５．７％，非常に減った２２．９％と６０％近くが減少したとの回答であった。

・対象者（お子さん・自閉症の方本人）の外出時のマスク着用に関する質問では，「特に抵抗なく必要時に着用していた」（５４．４％），「抵抗感はあったようだが必要時には我慢してマスクを着用していた」（２５．１％），「外出時など必要時にマスク着用ができないことがあった」（６．６％），「マスク着用はしなかった（できなかった）」（８．

７％），その他（５．２％）との回答であった。

・「マスク着用はしなかった（できなかった）」，「マスク着用ができないことがあった」との回答者に，マスクを着用しないことで生じた問題等があるかとの質問では，「周囲の人から嫌な顔をされたり，注意を受けた」（３７．８％），「散歩や運動など普段の好みの行動が制限された」（２１．１％）との回答が比較的多かったが，「特に困りごとや問題はなかった」との回答も２１．１％あった。

・「抵抗感があったようだが外出時など必要時には我慢してマスクを着用していた」との回答者に，マスクをしたことで何か変化があったか質問したところ，約８８％が変化ありと回答し，そのうち約５４％が悪化傾向の変化があったと回答した。具体的には，「イライラする」，「マスクを噛んでいた」，「強要されていると感じている」，「落ち込む」，「暑いときに嫌がる」等の回答が多くみられた。また，なぜ我慢したのか質問したところ，「外出したいから」（３１．６％），「感染したくない」（３１．０％），「感染させる不安」，「他者の批判が怖い」（いずれも１８．７％）との回答となった。

・マスクを「特に抵抗なく必要時に装着していた」との回答以外の回答者に，マスクをつけることに抵抗があったあるいはマスクができなかった理由を質問したところ，「感覚過敏」（５３．５％），「マスクをする理由がわからない」（４０．５％）との回答が圧倒的に多かった。

・新型コロナウイルスによる社会変化に対して，自閉症の方にどのような支援が必要と考えるかという質問に対しては，環境整備，理解，支援方法等の回答が多かった。具体的にみると，「感覚過敏や障害特性のため感染予防が難しい場合の周囲の理解（マスク着用・手洗いうがい）」，「実際に子どもや親が感染（入院）したときが不安，その対応（受け入れ先や任せられる人）」，「本人が安心できる場所・人の確保」，「視覚支援，見通しを持てるような接し方（スケジュール等）・本人にわかるような説明・伝える手段」，「普段と変わらないサイクルで生活できること」などについての回答が多かった。

・新型コロナウイルスによる社会変化と発達障害の支援ニーズについて自由記述を求めたところ，「発達障害に限らず，寛容さ/不寛容さのせめぎ合いが表面化したように思う。多様性を認める寛容な社会にするため，『様々な困り感を持つ人がいる』ことが受け入れられるような支援策を考えていきたい/考えてほしい」，「障がいの度合いによって必要な支援は変わってくると思います。重度の方は，コロナそのものへの不安はあまりなく（理解できず），むしろいつもの生活ができなくなったことへの不安の方が大きいの

ではと思います。障がいの程度が軽い方は，生活の変化に加えて感染の不安，この先どうなるか見通しが立たない不安など様々な心配を抱えているのではないかと思います。家族だけで対応するには限界があるので，通学・勤務先，あるいは公的機関で発達障害の方たちが抱える不安に対してのカウンセリングをして問題点を洗い出し，適切な支援をしていただきたいと思います」，「教室や飲食の時のボードや仕切りなど，社会のほうが自閉症の人の特性配慮や支援ニーズに近づいてきているように感じている」，「発達障害は，なかなか一筋縄ではいきません。発達障害だけをフォーカスせず，背景にあるあらゆるスペクトラム（家庭内の事情や経済的なことも含め）幅広い視野で必要とされる支援を。国の施策や社会，地域に支援機構が整備されていても，必要とされる当事者がつながり，安心して力を存分に発揮できるとは限らない。つなげるコーディネーターは専門家でなく友達でもよい。地域の資源をフル活用して，みんなで考えていくのが望ましい」などの回答があった。

以上

資料2

コロナ禍での障害当事者の困りごと

2021（令和3）年3月23日
日弁連障害者高齢者
権利支援センター幹事
明石市あかし保健所
法務相談支援担当課長
弁護士　青　木　志　帆

略歴

▶２００８年　司法試験合格（新６２期）

▶２００９年　弁護士登録（兵庫県弁護士会）

▶２０１５年　明石市役所入庁

☆　福祉部障害者・高齢者支援担当課長

　　障害者施策三条例の制定にかかわる

☆　社会福祉協議会（派遣）権利擁護推進担当課長

☆　市長室　政策法務担当課長

☆　あかし保健所ひきこもり相談支援課長

☆　あかし保健所法務相談支援担当課長（現在）

明石市新型コロナウイルス感染症の患者等に対する支援及び差別禁止に関する条例

パブリックコメントに寄せられた意見から

明石市新型コロナ差別禁止条例へのパブリックコメント

条例の趣旨：

新型コロナウイルス感染症の拡大が長期化する中で、本市におけるこれまでの取組を踏まえつつ、市、事業者が取組むべき事柄を改めて明らかにするとともに、市民、事業者、施設等に対する「総合的支援」と、感染者等に対する偏見や誹謗中傷などの「差別的取扱いの禁止」を柱とした条例。

https://www.city.akashi.lg.jp/kansentaisaku/toukatu/20210101_corona_jyourei_ennkiannai.html

募集期間：令和3年1月12日～2月10日

結果：14名（25件）の意見が寄せられた

パブリックコメントに寄せられた障害当事者等からの意見

新型コロナウイルス感染症の陽性となった認知症及び精神疾患等を有する市民が、新型コロナウイルス感染症の症状ではなく、患者の疾患を理由に治癒困難として入院を拒否されない、又は、患者の疾患を理由に治癒困難として自宅療養とする場合は特別な支援（例えば、陽性者の移動にかかる費用などの助成）を行うという内容を追記してほしい。

責任・判断能力が欠如すると定められた疾患を有する方の味覚症状の有無について、自ら自覚して他者へ伝えることが困難にもかかわらず手続きが進められることは、権利擁護の観点から逸脱した行為であると考えます。

パブリックコメントに寄せられた障害当事者等の意見

1. 聴覚障害者がコロナ感染にかかった場合、入院となりますが、情報保障は整っているのでしょうか。テレビで見る限り、防護服を着てマスクをしていますし、コミュニケーション手段がないように感じ不安になりました。
2. コロナ感染者の自宅療養の場合、看護師や保健師が何時間課ごとに患者の体調を確認するために電話しているとのニュースを見た時、聴覚障害の場合はどうなるんだろうと気になります。電話はできません。もしチャットできるなら手話のできる看護師が一番いいです。やっぱり自宅療養は怖いです。
3. 上記の他、かかりつけ医やコロナの診察を行う医師との意思疎通のため、電話リレーサービスの24時間対応を求める声など、聴覚障害のある方からの意見があった。

（仮称）あかしインクルーシブ条例検討会

委員からの個別意見より

（仮称）あかしインクルーシブ条例とは

国連　ＳＤＧs
世界を変える１７の目標

日本障害フォーラム
イエローリボン運動

障害の有無や年齢、性別などに関係なく、生き生きと暮らせる
まちづくりの指針　　（仮称）あかしインクルーシブ条例

8

（仮称）あかしインクルーシブ条例検討委員との個別意見交換

個別意見交換の趣旨：

令和２年度中に検討会を終える予定であったが、コロナ禍の影響（特に基礎疾患を有する当事者委員がおられた）のため開催延期となった。

会議開催に代え、事務局が条例検討委員と個別に面談（オンラインを含む）し、コロナ禍の現状と条例に対する意見をうかがったもの。

参考：令和３年３月議会総務常任委員会資料

（仮称）あかしインクルーシブ条例の検討状況について

http://www2.city.akashi.lg.jp/gikai/c-8/iinkaisiryou2021.3.2.html

コロナによる障害者への影響について

【視覚障害者の困りごと】

- ガイドによる誘導について、これまでの手を触れての誘導から、声による誘導になったケースもあったと聞いている。
- 同行援護の利用は、本人もガイドも気をつかう。買い物をギリギリまで我慢する当事者もいた。
- 視覚障害者は、急な変化については教えてもらわないと対応できない。コロナ禍の買い物であればレジに並ぶ間隔、お金の受け渡しなど。

【聴覚障害者の困りごと】

- コロナにおける政府の会見では、次第に手話通訳者がつくようになったが、緊急時の情報を手話で提供している自治体は少ない。

コロナによる障害者への影響について

【難病当事者の困りごと】

- 難病の人からの連絡が増えた。難病当事者が孤立している懸念がある。
- 難病当事者の家族への支援は不十分。既存の制度をすべて使ってしんどかったら言ってね、というスタンスであり、当事者は疲れ切ってしまう。支援を受けるために支援が要るというのが現状。

【その他の困りごと】

- 重度障害児の親としては、自分がコロナにかかったら家族が大変だという気持ちが強い。医療体制なども家族単位で考えてほしい。
- 旅行会食を促すGOTOキャンペーンにしても、介護や付き添いが必要な障害者は使えない。

コロナによる障害者への影響について

【事業所における影響】

- 家族がコロナに感染し、濃厚接触者である重度障害者について、行政から入所できないかという問い合わせがあるが受け入れにくい。そうした人は、在宅でホームヘルパーを利用するが、現在の制度設計では、利用可能時間が短く、当事者の生活を十分に補えないことがコロナによって顕在化した。これは「親亡きあと」の問題であり、「いつ来るか」ではなくて「いつか必ず来る」問題である。
- 保護者も含めて、在宅ワーク移行への理解が得られにくかった。特に仕事をしている保護者からは、「なぜ預かってくれないのか」という声も多く聞かれた。保護者に理解してもらうためにも、家庭とのコミュニケーションが必要だと感じた。

コロナによる障害者への影響について

【差別・排除について】

- 障害者がいろいろな場面で感じていた疎外感を、健常者も体感しているのではないか。
- 感染のおそれから、一般人が一般人を差別している。かかった人が悪という風潮がある。誰でもなるということを認識する必要がある。

コロナ禍と障害者

弁護士にできそうなこと

弁護士にできそうなこと

障害者のニーズを顕在化させる

- 緊急時（災害時）の情報保障の後退

非常時の障害福祉サービスの確保・保障

- 濃厚接触で自宅待機になった障害者へのヘルパー（支給量／提供拒否の禁止※）
- 同行援護の確保（提供拒否の禁止／サービス提供困難時の対応※）

緊急支援策の障害者への適用を保障

- GOTO事業、各種貸付・給付金等から障害を理由として排除されないように。

※障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく指定障害福祉サービスの事業等の人員、設備及び運営に関する基準11条、13条